

野球王国とも称される愛媛。今年からは「愛・野球博」も開催され、3年間にわたって多彩なイベントが計画されている。中心的存続である松山で東京五輪・パラリンピック「文化プログラム」の一環として、松山商高、済美高、松山中央高の高校生記者が「野球文化」を取材した。

松山商高

松山市城山公園の北西の一角に、ホームベースとピッチャープレートがひっそり置かれている。かつて数多くの名勝負の舞台となつた松山市営球場を今に伝える「遺産」だ。



えひめEgaoリポート⑦

市営球場は1948年に開場。以来、高校や社会人、プロ野球などが行われ、大勢のファンが詰めかけるなど愛媛の野球の聖地的存在となつた。

しかし2003年、城山公園が国史跡のため施設改修が困難で、老朽化も重なり閉場。聖地は坊っちゃんスタジアムへと移った。跡地には、球場の歴史を刻んだ解説板も設けられている。

6月10日には、「高校生記者会」で、野志克仁松山市長が跡地紹介の方などを語る野志松山市長(撮影・堀井)

高校生記者を前に、松山市営球場の思い出



イド役を担当。中学時代に生に驚いたことや地元放送試合で訪れ、ふかふかの芝局のアナウンサー1年目、

夏の高校野球決勝が大熱戦になり「うまく実況できなかつた」とのエピソードなどを明かした。

(江戸瑠々花、窪田絢巴)
△随时掲載します

松山「野球文化」⑦

名勝負彩つた「遺産」

本年度から県と県内20市町が連携して実施している

「愛・野球博」について、

「正岡子規ゆかりの野球文

化を知つてほしい」と熱く語つた。

目線 放送部



タイトルカットは松山南高砥部分校デザイン科制作。高校生記者の活動は愛顔(えがお)スポーツ応援アプリ(愛媛新聞ONLINEアプリ)で随时更新。



松山の野球の歴史に触れた。市営球場はなくなつても、人々の心にいつまでもあり続けていることが分かった。野志市長の野球に対する情熱や愛情を強く感じることができた。(A,M)